

## 博士論文審査結果の要旨

博士論文審査委員会

主 査 井上 雅裕

審査委員 長谷川 浩志

審査委員 間野 一則

審査委員 山崎 敦子

審査委員 五百井 俊宏

氏 名	丸山 智子
論文題目	シミュレータを活用した疑似体験と実行動のすり合わせによる リーダーシップ教育
〔論文審査の要旨〕	
<p>申請者は、リーダーシップを「人間関係のスキルを活用することによって、個々の強みを活かし、人々を巻き込んで物事を達成できる能力」と定義している。従来のリーダーシップ教育は知機の獲得だけにとどまり、行動やプロジェクトの成功に結びついていなかった。申請者は、知識の習得、シミュレータを活用した疑似体験、疑似体験を実行動へ促し、省察するサイクルを一定期間継続することによって、大学院生の行動変容を促進させる斬新な教育方法を構築し、実施した。</p> <p>申請者は、教育プログラムを実施した評価結果を基に PDCA サイクルを回し、教育プログラムを6年間に、3段階に渡り進化させている。学修教育目標を明確にし、ラーニング・ポートフォリオや学生グループによる省察等により学生が自らの成長を確認できる仕組みを導入し、モチベーションを維持させることで、実践の場でのリーダーシップ行動を、更に促進させるプログラムを構築した。さらに、リーダーシップ教育と、PBL（プロジェクトベースラーニング）の相乗効果を評価する取り組みが実施され、両教育を同時並行で実施することにより効果が促進されることが実証されている。</p> <p>ループリックによる事前事後の360度評価、ラーニング・ポートフォリオ、インタビュー及びその裏付けとなるEQ診断といった評価を実施することで、学生の行動変容に至る教育プログラムの効果が多面的に検証され、実効があることが示されている。</p> <p>提出された博士論文にかかわる業績として、学術論文（第一著者2件、第二著者2件、合計4件）と申請者が在学中に行った国際会議論文（第一著者1件）が採録されており、課程博士（社会人早期修了コース）学位審査基準を上回る業績を確認した。またこれ以外にも、国際会議論文（第二著者）が1件あることも確認した。</p> <p>本論文は、従来のリーダーシップ教育の問題点を分析し、斬新な教育方法を提案、構築し、実施、検証したもので、高く評価できる。全会一致で合格と判断した。</p>	

# 論 文 要 旨

2015年1月13日

※報告番号	甲 第 180号	氏 名	丸山 智子
主論文題名			
シミュレータを活用した疑似体験と実行動のすり合わせによるリーダーシップ教育			
内容の要旨			
<p>階層的組織構造を前提とした工業社会からネットワーク型組織構造による創造的頭脳労働から価値が生まれる情報社会に移行することによって、一人のカリスマリーダーが独裁的な手法によって周りの人たちを動かすスタイルから、あらゆる組織において、個々の強みを活かし、人々を巻き込んで物事を達成できる能力としてのリーダーシップが必要となってきた。</p> <p>工学系高等教育機関においては、基礎教育としての情報処理、コミュニケーションの知識、プロジェクトマネジメント、及び応用力としてのチームワーク、リーダーシップなどの教育の実施が期待されている。これまで、リーダーシップ教育においては、座学中心の授業スタイルで、知識の習得にとどまっており、得た知識をいかに実践に結びつけていくかが大きな課題となってきた。</p> <p>本論文ではリーダーシップを「<u>人間関係のスキルを活用するところによって、個々の強みを活かし、人々を巻き込んで物事を達成できる能力</u>」と定義する。そして、知識の習得、シミュレータを活用した疑似体験、疑似体験を実行動へすり合わせるサイクルを一定期間継続することによって、得た知識を実践に結びつけ、新しいリーダー行動の定着までを目指した教育プログラムを構築することを目的とする。</p> <p>本リーダーシップ教育プログラムは 2008 年度から芝浦工業大学大学院理工学研究科修士課程学生を対象に実施し、その実施評価結果を基に PDCA サイクルを回し、教育プログラムを3段階（プログラム A→B→C）に渡り進化させた。</p> <p>2008 年度から実施したプログラム A では、リーダーシップに関する知識・理論の習得、シミュレータを活用した疑似体験のトレーニング、疑似体験を実行動にすり合わせることによって、知識を実践に結びつけるリーダーシップ教育プログラムを構築し、授業へ導入した。シミュレータでは様々なアプローチを試すことができるので、学生のリーダーシップ行動の幅を広げ、自らの思考や行動の癖を把握し、行動改善の糸口をつかむことを可能にした。更に、実行動をフィードバックし改善点を再度シミュレータでトレーニングすることによって行動変容を促進させた。効果検証として、コース前後にリーダーシップ行動に関し、指導教員、本人、ゼミの先輩同輩、後輩による 360 度評価を実施した。</p>			

検証結果から、知識の習得、シミュレータを活用した疑似体験、疑似体験と実行動のすり合わせによって、学生のリーダーシップ行動向上の効果を確認した。

2011年度から実施したプログラムBでは、プログラムAのコース全体を評価し、更に効果を高めるために、シミュレータと実行動の間にロールプレイの反復練習を取り入れた。ロールプレイはシミュレータでの疑似体験を本物の人を相手にして練習できるので、学生の疑似体験と実行動のギャップを埋め、より実践へ移すことへの抵抗を減少させることを可能にした。学習評価については、学修教育目標を明確にし、学生が自らの成長が確認できるようループリックによる行動特性の360度評価とラーニング・ポートフォリオを導入した。モチベーションを維持させ自らの成長度合いを可視化させることで、実践の場でのリーダーシップ行動を更に促進させることができた。特に、ラーニング・ポートフォリオからは、技術的活動でのコミュニケーションの重要性を自覚するとともに、研究室やゼミでの運営を積極的に行うことができるようになったなど、学生のリーダーシップ行動が変化するレベルに達する学習効果を確認した。

2013年度から実施したプログラムCでは、プログラムBまでのコース評価の結果から、実践適用機会の増加とチャレンジングな場の設定を行うことによって、新しい行動の定着レベル達成を目指した。これらを満たす方法として、リーダーシップ教育と並行して行われている産学・地域連携 PBL (Project Based Learning) において実践適用を行った。産学・地域連携 PBL では、研究室でのゼミや日常生活と違って、多分野の学生とチームを組んで目標達成に向かうことが求められ、また成果を出す必要があるため、緊張感やプレッシャーを感じるチャレンジングな状況にある。そして、自分と違う分野の学生とチームが編成されるため、メンバー間の意志疎通、プロジェクトに対する相互理解の促進が要求される。そのような状況の中、学生にあらゆるチャンスを活用して、疑似体験を実行動にすり合わせることを実施させた。更に、コース終了後も、継続してリーダーシップが発揮できる国際 PBL などの場を提供することで、学生の対人関係力を向上させ、新しい行動を定着させる教育プログラムを実現した。結果として、360度評価、ループリック、ラーニング・ポートフォリオ、インタビュー及びその裏付けとなる EQ 診断といった評価を実施し、教育プログラムの効果を多面的に検証することで、その妥当性を確認した。